

ベランダバードウォッチ 2023 年冬調査報告

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木県支部

気が付くと今年も家の周りをツバメが飛び交い、ウグイスやシジュウカラが庭先などで囀る季節になってしまいました。大変遅くなりましたがベランダバードウォッチ 2023 年冬の調査結果を報告させていただきます。

調査状況

2023 年冬（以下 23 年冬）は、北海道から九州までの合計 53 名によって、家での調査および家の周りの調査が各 37 か所で実施されました。経年的な調査地数の変化をみると、両調査とも 19 年から 20 年冬をピークにその後急激に減少傾向にあります（図 1）。同じ調査を長年に渡って実施することは参加者の年齢の高齢化などのほかモチベーションを維持する上でも難しいのかもしれない。調査地を便宜的に 6 区分に分類すると、例年通り関東・甲信地方が最も多い一方で、中国・四国地方の調査地は 1 か所ずつで前年などと比べるとさらに減少していました（図 2）。一方で、東北・北海道では家の周りの調査地は少ないものの、今冬では家での調査が 5 か所と昨年より増加しました。これらの地域で家の周りの調査が少ないのはやはり冬期の厳しい寒さが関係しているものと思われる。

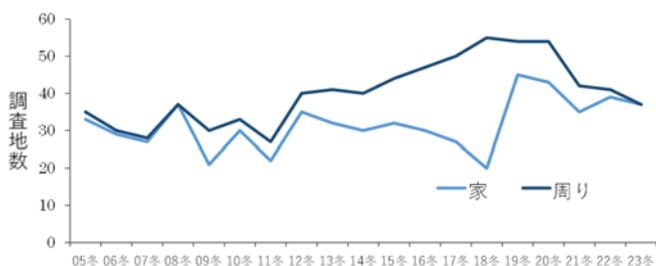


図 1. 調査地数の推移

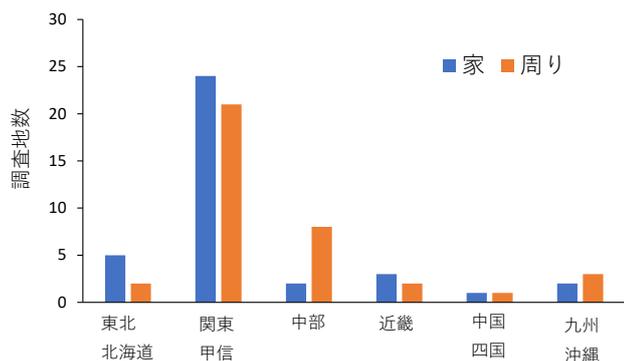


図 2. 地域別の調査地数

記録種

付表に、23 年 10 月から 24 年 2 月末（家での調査は 12 月 1 日から）までに記録された種をまとめました。家での調査 59 種、家の周りの調査 111 種の合計 116 種（種不明を除く）が記録されました。記録された種数は、両調査とも 22 年冬より 5-6 種少ないものの概ね同じでした。記録された種を見ると、今年も家の周りの調査では家での調査より調査範囲が広いことから、カモ類やサギ類、シギ・チドリ類など水辺の種も多く記録されました。やはり、調査に参加する方は、調査地を選定する際に鳥の多い河川や池などの水辺が含まれるように選ぶ傾向があるのかもしれない。さらに、秋冬期の調査にもかかわらず、例年と同様に記録種にはツバメやイワツバメ、ノビタキ、コサメビタキ、キビタキなどの夏鳥の種も多く記録されました。これは、家の周りの調査では調査期間が 10 月から 2 月のため、渡り途中の夏鳥が記録されたためです。なお、調査地の中には島や北海道での記録が含まれたため、シマエナガやタネコマドリなど亜種名で報告された種がありましたが、今回は種名で記載しました。

主要な種の記録率の比較

表 1 は、23 年冬の家の周りや家での調査の記録率上位 15 種を比較したものです。記録率の算出方法は、各種の記録された合計回数をそれぞれの調査の全調査回数で除した値です。また、23 年冬と 22 年冬の両調査を比較するために 22 年冬の記録率上位種も併記しました。この表をみると、調査地は両年で若干異なっているにも関わらず、両調査の記録率上位 15 種の顔触れは、順位こそ多少異なるものの両年ともほぼ同じでした。このような記録種の傾向は、過去に実施した調査でも見てとれます。調査地は、関東地方が多いものの北海道から九州まで分布しています。これらのことから、身近な環境における主要な鳥の生息種は経年的にみても全国

表1. 2023年冬期と2022年冬期における上位15種の記録率と順位

家での調査2023年冬		家での調査2022年冬		家の周り2023年冬		家の周り2022年冬	
記録種	記録率	記録種	記録率	記録種	記録率	記録種	記録率
1 ヒヨドリ	0.68	ヒヨドリ	0.76	ヒヨドリ	0.92	ヒヨドリ	0.98
2 スズメ	0.51	スズメ	0.65	スズメ	0.84	ハシブトガラス	0.82
3 ハシブトガラス	0.44	ハシボソガラス	0.35	ハシブトガラス	0.80	スズメ	0.80
4 ハシボソガラス	0.35	ハシブトガラス	0.30	シジュウカラ	0.71	シジュウカラ	0.72
5 メジロ	0.29	キジバト	0.26	キジバト	0.67	キジバト	0.71
6 ムクドリ	0.28	ムクドリ	0.24	ハシボソガラス	0.67	ハクセキレイ	0.70
7 ツグミ	0.21	メジロ	0.22	ハクセキレイ	0.67	ハシボソガラス	0.68
8 シジュウカラ	0.19	ハクセキレイ	0.19	メジロ	0.65	メジロ	0.68
9 ハクセキレイ	0.19	シジュウカラ	0.17	ムクドリ	0.61	ムクドリ	0.53
10 カワラヒワ	0.18	ツグミ	0.14	ドバト	0.55	ドバト	0.51
11 キジバト	0.18	ジョウビタキ	0.14	ツグミ	0.49	モズ	0.47
12 ジョウビタキ	0.11	モズ	0.12	モズ	0.48	ジョウビタキ	0.41
13 ドバト	0.10	ドバト	0.09	ジョウビタキ	0.47	カワラヒワ	0.35
14 カルガモ	0.10	シロハラ	0.06	カワラヒワ	0.35	ツグミ	0.33
15 ウグイス	0.09	カルガモ	0.05	ウグイス	0.33	ウグイス	0.33

的に似たような傾向にあることがわかります。そして、これらの種が日本の身近な環境を代表する種と言えます。一方、記録率をみると家での調査では、今年度も家の周りの調査より全体的に記録率が低く、記録率3位のハシブトガラスや同4位のハシボソガラスでも家の周りの同種の記録率の半分以下なのがわかります。これは、家での調査では家の周りの調査に比べて調査範囲が狭いことや調査回数が少ないことによるものと思われる。

家の周りの調査による主な冬鳥の群れの大きさ

身近な冬鳥であるツグミ、シロハラ、シメ、カワラヒワの個体数ランク別の記録状況を22年冬と23年冬で比べてみました(図3)。23年冬のツグミの個体数ランク別の記録件数は3~5羽、6~20羽、21~99羽のランクでは22年より多く記録されました。同様にシメも6~20羽および21~99羽の個体数ランクでは、22年より23年冬で多いことが見てとれます。ところで、バードリサーチの会員のみなさんから送りいただいた今冬の冬鳥の飛来情報の中に、シロハラが少ないとの書き込みが目につきました。そこで、今冬のシロハラの情報件数をみると、シロハラは「1~2羽」と「時々記録される」の2つのランクが報告されたものの、1~2羽の記録件数は22年冬に比べて著しく少ないことがわかりました。このことから、今冬のシロハラはやはり何らかの理由で飛来数が少なかったのではないかと思われます。一方、カワラヒワでは、23年の1~2羽と3~5羽の記録件数はやや少ないものの、6~20羽や21~99羽の群れサイズでは22年とほぼ同じでした。カワラヒワは冬に大陸などから飛来する群れがいますが、留鳥

として国内に1年中生息しているため、冬期の個体数ランク別の記録件数が両年であまり違いがなかったのかもかもしれません。

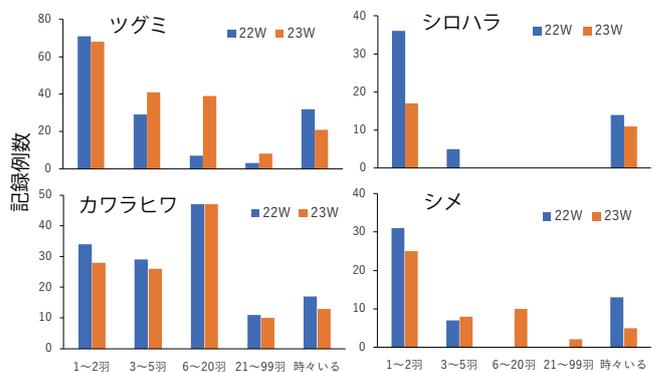


図3. 身近な冬鳥の個体数ランク別の記録状況

家での調査によるツグミの記録個体数の比較

家での調査は、冬(12月から2月末)に各調査地とも5回実施して記録された種の個体数を報告します。ここでは、調査地が多かった関東地方の調査地10か所における、22年冬と23年冬のツグミの調査地当たりの平均個体数を比較しました。その結果、23年冬の方が22年冬より平均個体数が多かった調査地は7か所で、逆に22年冬の方が多かった調査地は3か所と少数でした(図4)。さらに、全国で実施された調査地のうち調査回数が5回以上の調査地17か所で比較してみると、23年のほうがツグミの平均個体数が多かったのは11か所で22年の方が多かったのは6か所でした。これらのことから、ツグミの渡来数は23年冬では22年冬よりやや多かったと言えます。なお、同様にカワラヒワやシメの各調査地の記録個体数を比較することを試みました

が、これらの種では記録された調査地が少ないこともあり、両年での明確な違いは得られませんでした。

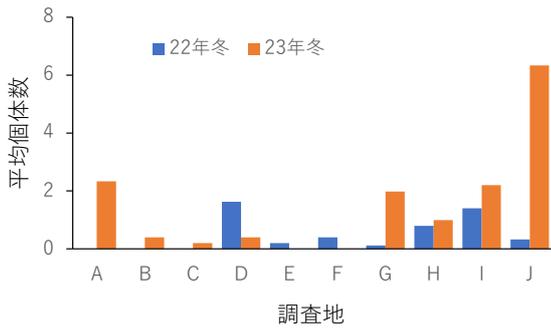


図4. 22年冬と23年冬の関東地方の調査地におけるツグミの平均個体数の比較

最後に

冬は、都市公園など身近な環境でも比較的多くの種類の鳥たちが生息しています。また、冬鳥の中には、木の実のなり具合で年によって渡来数が著しく変動する種があります。そのため、身近な環境に生息する鳥たちの生息状況を調べるベランダバードウォッチにとって、秋から冬は最良の季節です。23年冬の調査から、上記のように今冬はツグミが多く記録された調査地が多い一方で、シロハラが少なかったらしいこと

がわかりました。さらに長年に渡って調査を継続することで、スズメやヒヨドリ、ムクドリなどの身近な鳥たちの生息状況の変化なども見えてくるかもしれません。月並みな言葉ですが「継続は力なり」です。ぜひ、今後もこの調査にご協力いただけましたら嬉しいかぎりです。この報告書がバードウォッチのホームページにアップされるころには繁殖期の調査が始まっていることと思います。引き続きベランダバードウォッチ繁殖期の調査にもご参加ください。

末尾ながら、調査にご参加いただきました皆様のお名前を記してお礼に替えさせていただきます。青木雅人・秋元玲子・秋山洋佑・渥美美保・天沼弘勝・五十嵐勉・石坂あや子・石原渉・入船憲一・及川茂・大出水幹男・大井智弘・大塚啓子・沖田絵麻・小野彰史・加藤美奈子・黒沢令子・後藤未央・小林尹夫・小林俊子・坂田樹美・笹井あかね・笹倉千江花・佐藤一博・佐藤司・佐藤留美子・須田由美・関口佳子・大門明美・大門聖・高橋佳子・滝澤三郎・武居佳子・武谷由紀子・辰巳文吾・田中利彦・中家由理・長嶋宏之・西川光一・西田好恵・野村英樹・林田治也・菱田清和・松田修・三田長久・三藤文彦・宮崎朋子・緒方大記・安田耕治・山田昭光・吉中康展・吉邨隆資の各氏（五十音順）

とりまとめ：平野敏明

付表. ベランダバードウォッチ2023年冬記録種一覧

記録種	家	周り	記録種	家	周り	記録種	家	周り
1 キジ		○	40 ミサゴ	○	○	79 ヒレンジャク		○
2 マガン	○		41 トビ	○	○	80 ゴジュウカラ		○
3 オオハクチョウ	○		42 ハイロチュウヒ	○	○	81 モズ		○
4 オンドリ		○	43 ツミ	○	○	82 シロハラ	○	○
5 オカヨシガモ		○	44 ハイタカ	○	○	83 アカハラ	○	○
6 ヨシガモ		○	45 オオタカ		○	84 ツグミ		○
7 ヒトリガモ		○	46 ノスリ	○	○	85 ルリビタキ	○	○
8 アメリカヒドリ		○	47 フクロウ		○	86 ジョウビタキ	○	○
9 マガモ	○	○	48 カワセミ	○	○	87 ノビタキ		○
10 カルガモ	○	○	49 アリスイ	○	○	88 イソヒヨドリ	○	○
11 ハシビロガモ		○	50 コゲラ	○	○	89 コサメビタキ		○
12 トモエガモ		○	51 アカゲラ	○	○	90 ヒタキ科		○
13 コガモ	○	○	52 アオゲラ	○	○	91 スズメ	○	○
14 ホシハジロ		○	53 チョウゲンボウ	○	○	92 キセキレイ	○	○
15 キンクロハジロ		○	54 ハヤブサ		○	93 ハクセキレイ	○	○
16 ミオアイサ		○	55 サンショウクイ		○	94 セグロセキレイ	○	○
17 カイツブリ		○	56 カケス	○	○	95 ピンズイ		○
18 カンムリカイツブリ		○	57 オナガ	○	○	96 タヒバリ		○
19 キジバト	○	○	58 ミヤマガラス		○	97 アトリ	○	○
20 アオバト	○		59 ハシボソガラス	○	○	98 カワラヒワ	○	○
21 コウノトリ		○	60 ハシブトガラス	○	○	99 ムクドリ		○
22 カワウ	○	○	61 カラス類	○	○	100 マヒワ	○	
23 ゴイサギ	○	○	62 キクイタダキ		○	101 ムクドリ	○	
24 アオサギ	○	○	63 ハシブトガラ	○	○	102 ベニマシコ		○
25 ダイサギ	○	○	64 ヤマガラ	○	○	103 ウソ		○
26 チュウサギ		○	65 ヒガラ	○	○	104 シメ	○	○
27 コサギ	○	○	66 シジュウカラ	○	○	105 コイカル		○
28 クイナ		○	67 ヒバリ		○	106 イカル	○	○
29 ヒクイナ		○	68 ショウドウツバメ		○	107 ホオジロ		○
30 パン		○	69 ツバメ		○	108 ホオアカ		○
31 オオパン	○	○	70 コシアカツバメ		○	109 カシラダカ	○	○
32 ヒメアマツバメ		○	71 イワツバメ		○	110 アオジ	○	○
33 ケリ		○	72 ヒヨドリ	○	○	111 オオジュリン		○
34 イカルチドリ		○	73 ウグイス	○	○	112 コジュケイ	○	○
35 コチドリ		○	74 エナガ	○	○	113 ホンセイインコ	○	○
36 タシギ		○	75 メボソムシクイ類		○	114 ガビチョウ	○	○
37 クサシギ		○	76 メジロ	○	○	115 ソウシチョウ	○	○
38 イソシギ		○	77 セッカ		○	116 ドバト	○	○
39 オジロトウネン		○	78 キレンジャク	○		種数	59	111